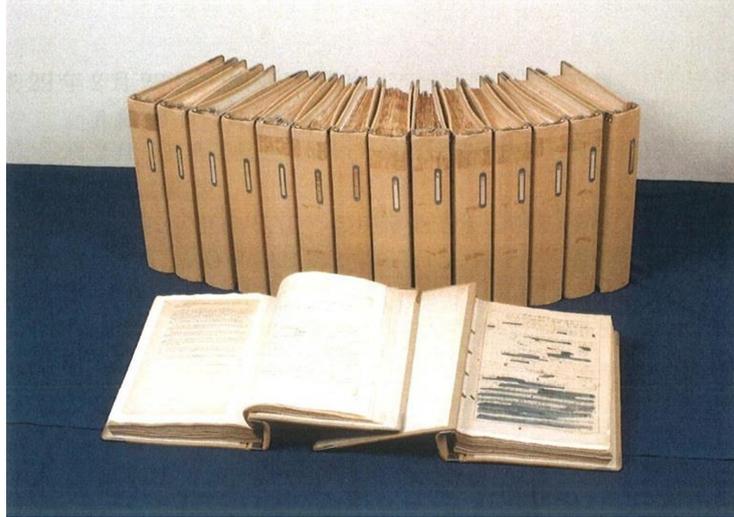
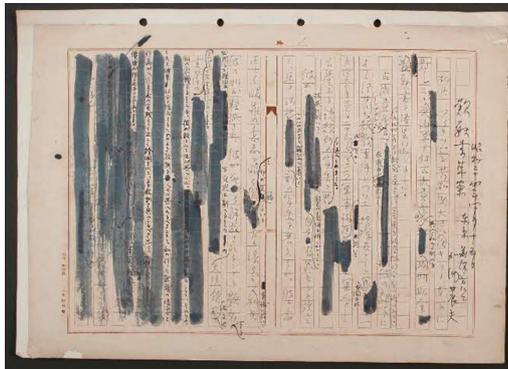


加納辰夫文書について 【資料内訳】



加納辰夫文書

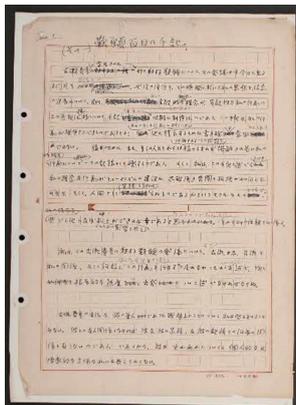
① 加納辰夫「助命嘆願書草案」(1点)



日本人戦犯赦免運動を始めた動機と経緯が48枚にわたって詳細に書かれている。黒塗りか所が多くあり、苦しみながら推敲したと判る。

101(1). 助命嘆願書草案
(1949年4月15日)

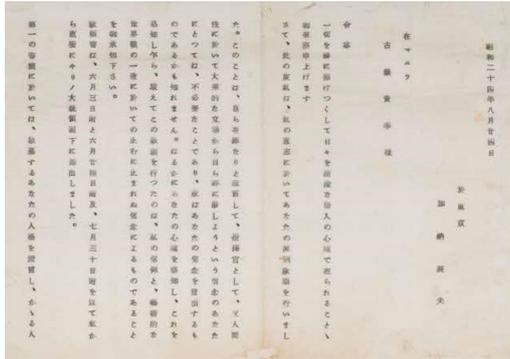
② 加納辰夫「嘆願百日の手記」(1点)



日本人戦犯赦免運動を始めた動機と経緯が48枚にわたって詳細に書かれている。黒塗りか所が多くあり、苦しみながら推敲したと判る。

201(1). 嘆願100日の手記(1949年)

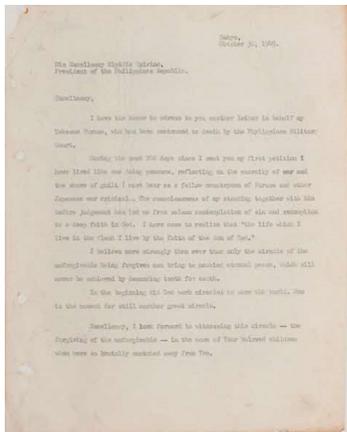
③ 古瀬貴季宛書簡（2点）



嘆願運動の端緒となった古瀬貴季に対して、彼の願いに反して赦免嘆願を始めたことへの理解を求めた書簡。

301(1). 古瀬貴季宛(日本文)
(1949年8月24日)

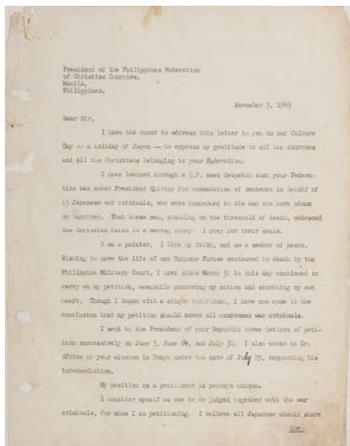
④ フィリピン大統領エルピディオ・キリノ宛書簡及び返書（63点）



古瀬の赦免を求める嘆願に始まり、自ら有罪と主張している古瀬を赦すことこそが戦争裁判の目的を達成し、すべての戦犯を救うことになるとの意見を記す。そして全戦犯が自らの罪の大きさを自覚した上で赦免することが平和を築くことになるとし、虐殺された「貴下の愛児の名において」「赦し難きを赦す」ことを大統領の任期終了まで一貫して訴え続ける。1949年12月28日に戦犯の赦免に関する権限が大統領に委ねられて以降、嘆願書に対してフィリピン大統領府からキリノ大統領が必ず配慮するとの返書が送られてきた。

404(1). フィリピン大統領エルピディオ・キリノ宛
第4書簡(1949年10月30日)

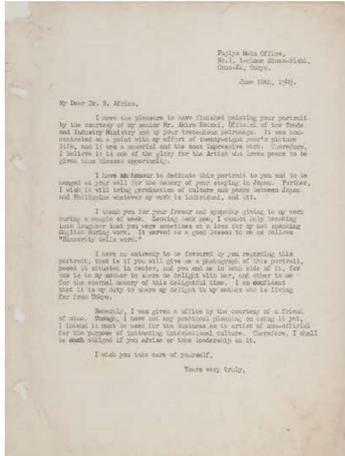
⑤ フィリピンキリスト協会連合会宛書簡及び返書（11点）



キリスト教に改宗した日本人戦犯に対して、大統領の慈悲を求める嘆願を行っていた同連盟の活動を新聞で知った加納が、イエス・キリストの愛はあまねくすべての人々に及ぶべきだと書簡で主張した。キリスト教、仏教、神道が連携して日本人戦犯の赦免を求めるべきとする独自性あふれる書簡。

501(1). フィリピン・キリスト教会連合会宛 第1書簡(1949年11月3日)

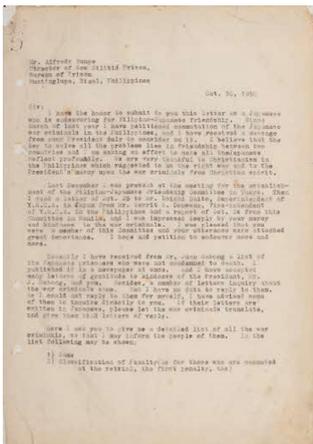
⑥ 駐日フィリピン代表部団長、フィリピン大使館大使宛書簡（83点）



加納は使節団長ベルナベ・アフリカの肖像画を描いたのが契機となって代表部の信頼を得た。その後、代表部は大統領へ直接嘆願書簡を届けたが、その際のやりとり。1952年には、大使からキリノ大統領が加納の訴えに即した内容で赦免を行うつもりでいるが、その時期をいつにするかが課題だと伝える返書が届いた。戦犯赦免後は、今回の赦免の在り方を世界に広げたいので、駐日フィリピン大使に配慮をお願いしたいとする内容の書簡が続く。

601. 駐日フィリピン公使ベルナベ・アフリカ宛 第1書簡 (1949年6月10日)

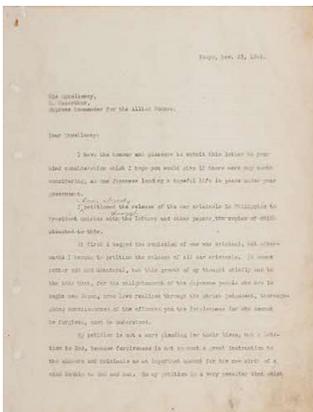
⑦ ニュー・ビリビッド刑務所長アルフレッド・M・ブニエ宛書簡及び返書（8点）



詳細な日本人戦犯名簿の送付を依頼するところから書簡の交換が始まる。ブニエは全戦犯のリストを一か月後に送ってきた。加納は自分の書簡を戦犯に読ませて欲しいとの要請をすると、ブニエはそれに応じて戦犯に読ませた。刑務所長の立場にあっても、キリスト教徒として戦犯赦免の運動を支援する内容が書かれている。

701(1). ニュー・ビリビッド刑務所長アルフレッド・M・ブニエ宛 第1書簡(1950年10月10日)

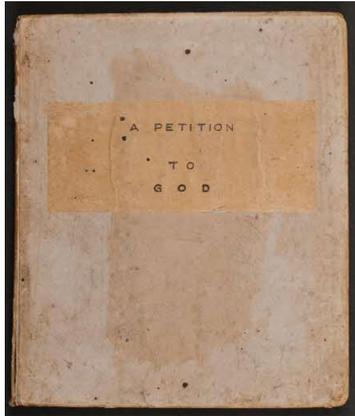
⑧ 連合軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥宛書簡（4点）



「赦し難きを赦す」ことこそが民主国家を作り上げる教訓になるとの自分の思索過程を示し、戦犯赦免への配慮を求めた。

801(1). 連合軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥宛 第1書簡(1949年11月25日)

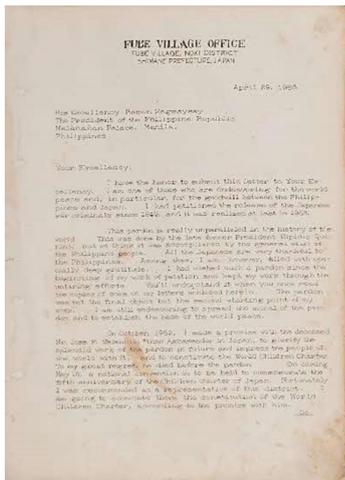
⑨ ローマ教皇宛文書・書簡及び返書（43点）



「赦し難きを赦す」ことこそが民主国家を作り上げる教訓になるとの自分の思索過程を示し、戦犯赦免への配慮を求めた。

901(1). ローマ教皇ピオ12世宛 第1書簡
(1952年4月28日)

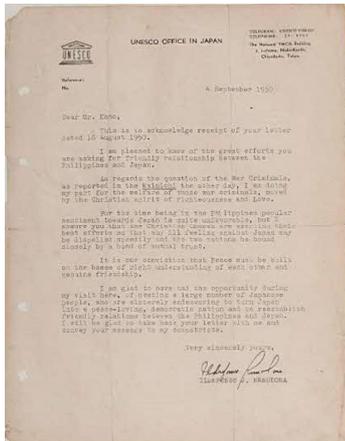
⑩ フィリピン第7代（ラモン・マグサイサイ）、第8代（カルロス・P・ガルシア）大統領宛書簡及び返書（10点）



キノ前大統領による日本人戦犯赦免は、同時にフィリピン国民の意思を象徴しているとして、繰り返し感謝の気持ちを記し、自分の究極の目的は戦犯赦免のモラルを広げ、世界平和の基礎を確立することであると現職大統領の配慮と支援を求めた。これに対して大統領も親書を送り、加納の取り組みを高く評価した。

1001(1). フィリピン大統領ラモン・マグサイサイ宛
第1書簡(1956年4月29日)

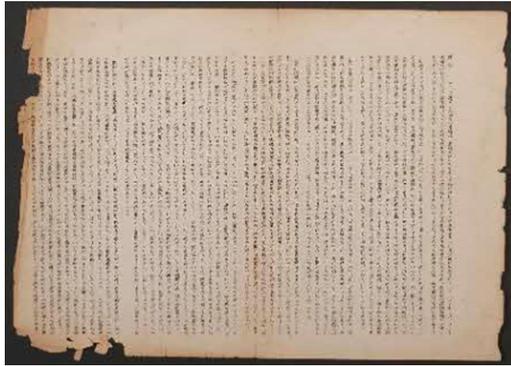
⑪ 政府関係者ほか宛書簡及び返書（15点）



外務省関係者に戦犯赦免運動の取り組みの経緯を述べた。自分の嘆願運動は、全ての日本人戦犯がその罪の軽重に関わらず赦免されることが新生日本を創り上げることになると訴え、配慮と支援を求めた。当時両国の親善のために来日したユネスコのレモローナとの交流を示す書簡もある。

1102. (返書) インデフォンソ・レモローナ
(1950年9月4日)

⑫ 加納辰夫「十年の歩み」(1点)



1949年に始まった10年間にわたる戦犯赦免運動を振り返り、成果と問題点を明らかにした。表裏9枚。

1201. 「十年の歩み」
(1958年12月27日)